

八重瀬町

ぐ し ちゃん
**具志頭
グスク**

八重瀬町具志頭



26° 7' 17.57" N
127° 44' 59.93" E



用語解説

●輸入陶磁器

海外貿易によって得られた陶磁器のこと。グスクの発掘調査で発見される貿易陶磁器は主に中国産であるが、他に朝鮮・ベトナム・タイ・日本産がある。貿易陶磁器ともいう。

●拝所

神霊が依りついたとされる聖域で、人が拜むところ。

●ノロ

地域の神事を執り行った女性。王府から辞令書を受けたものを公儀ノロという。



今は公園になっていて、展望台や慰霊碑などが建っているんだね。

入口近くには「タカヤクワ」と呼ばれる石積みがあるのだよ。「タカヤクワ」とは、「高い橋」を意味する言葉だと伝えられているのだよ。グスク内の発掘調査では輸入陶磁器のほか、グスク式土器や石器などが出土したのだよ。



遠景



町の南部にある具志頭集落の南東、太平洋を臨む標高約50mの石灰岩丘陵上に位置する遺跡です。海側は断崖になっており、見晴らしのよい場所です。

現在は公園として整備されており、一見グスクの印象がありませんが、入口の右手の茂みには監視台(見張り台)と言われている「タクヤクワ」という石積みがあり、その近くには積み方の異なる別の石積みが残っています。

過去に行われたグスク内の発掘調査では、縄文時代からグスク時代にかけての遺物を含む複数の地層が確認されており、土器や中国、朝鮮、東南アジアからの輸入陶磁器、本土産陶磁器、石器、金属製品、貝製品、獣骨、貝類等が出土しています。それらの遺物から、ここがグスクとして利用された14世紀から15世紀頃よりもはるか昔から人々の生活の場だったことがわかりました。

その他、グスク内には御嶽等の拝所やノロが馬の乗り降りの際に利用したとされる踏石があります。また、複数の沖縄戦没者慰霊の塔がある公園としても知られています。

【参考文献】

・具志頭村教育委員会。1986。『具志頭村の遺跡』。

● 城壁



● 野面積み・切石積み



● 城壁

グスクとして利用されるより、はるか昔から人々の生活の場だった



● 公園入口及び城壁遠景

糸満市

ま え ざ と 真栄里 かい づ か 貝塚

糸満市字真栄里



26° 7' 5.42" N
127° 40' 10.97" E

用語解説

●真栄里式土器

糸満市真栄里貝塚で最初に出土した弥生～平安並行時代I期の土器。沖縄島及び周辺離島に分布する。



糸満市立
中央図書館の
近くだね。



グスク時代の水田面・畦跡と近世の水田面が確認されたのだよ。農耕文化と関係のある「挾入石斧」も出土しているから、今後、貝塚の周辺から弥生～平安並行時代の水田跡が見つかるかもしれないね。

発掘調査風景



ま え ざ と お か が け し た し ゃ め ん
真栄里集落が位置する丘の西側崖下の斜面が
かい づ か お き な わ だ い
貝塚となっています。1967(昭和42)年に沖縄大
が く と み し る こ う こ う は っ く つ ち ェ う き
学と豊見城高校によって発掘調査が行われ、土器、
かい せ い ひ ん こ つ せ い ひ ん
石器、貝製品、骨製品等が出土しました。土器は、
つ ぼ が た か め が た
壺形と甕形にわけることができ、同じ時期の他の遺
跡と比べて壺形の土器が多く出土することが、ま え
ざ と かい づ か と く ち ェ う
跡と比べて壺形の土器の一つです。この調査で出土した土
器は、後に「真栄里式土器」と命名され、や よ い へ い
安並行時代I期(約2300～2100年前)を代表す
る土器として位置付けられています。

また、1996～1997(平成8～9)年にはお き な わ こ く
際大学による発掘調査が行われ、グスク時代と近
世の水田跡も見つかっています。

ほん い せ き や よ い へ い あ ん へ い こ う
本遺跡は、弥生～平安並行時代から近世までの
生活をj り ェ う よ う い せ き
知る上で重要な遺跡の一つです。

【参考文献】

- ・高宮廣衛・新田重清・上地千賀子. 1993. 「糸満市真栄里貝塚発掘調査概報：石器篇」. 南島考古(13):35-62.
- ・糸満市教育委員会. 1999. 『真栄里貝塚発掘調査報告書』.
- ・(財)沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室. 2003. 『沖縄県史 各論編 第2巻 考古』. 沖縄県教育委員会.

| | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|-----|-----|-----|-----|------|-------|------|------|------|------|------|----------|---------------|
| 500 | 600 | 700 | 800 | 900 | 1000 | 1100 | 1200 | 1300 | 1400 | 1500 | 1600 | 1700 | 1800 |
| 弥生～平安並行時代 | | | | | | グスク時代 | | | | 三山 | 第一尚氏 | 第二尚氏(前期) | 第二尚氏(後期) 近世琉球 |
| 無土器期 | | | | | | 新里村期 | | | | 中森期 | | | バネ |

畝状遺構



グスク時代と近世の水田跡を検出



水田面の検出状況

発掘調査風景



台風による現場冠水



発掘調査区遠景

糸満市 摩文仁 ハンタ原貝塚

糸満市摩文仁



26° 5' 24.75" N
127° 43' 3.91" E



用語解説

●土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

山口県下関市にある博物館。人類学・民俗学・考古学の三分野を研究している。

●石囲墓

人骨の周りや一部を石で囲った墓。

●放射性炭素年代測定

放射性炭素 (^{14}C) は炭素の同位体で、天然に存在する放射性元素のひとつ。地球上に広く存在し、食物連鎖によって生物に取り込まれる。遺跡に残る骨や貝、燃料に使った木炭、建物の柱、すべての有機物に炭素が含まれているので、放射性炭素年代測定法は、考古学の分野で最も広く使用されている。 ^{14}C は生物体が死ぬと減り始め、約5730年経過すると生前の2分の1になり、約1万1460年後には4分の1に、約1万7190年後には8分の1になる。この法則を基に、骨などの分析資料中にある ^{14}C の量を調べることで、何年前のものが推定できる。

●副葬品

遺体を葬る際にそえられた物。

当時の人々は、お墓として、この遺跡を大事に守っていたのかも、しれないね。



ほとんどの貝製品に装飾や、細かな文様がほどこされていて、当時の人々の貝を加工する技術が高かったことがわかるのだよ。



発掘調査風景



糸満市の南東端に位置し、標高約30mの崖下にある岩陰周辺が遺跡となっています。2007～2010 (平成19～22)年までの4年にわたって、糸満市教育委員会と土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム(山口県下関市)によって発掘調査が行われました。調査では石囲墓1基と、少なくとも85体分の集骨(骨をひとまとめにして葬っている状況)が確認できました。

人骨を放射性炭素年代測定法により調べた結果、石囲墓の人骨は約1000年前(弥生～平安並行時代Ⅲ期)、集骨は約3800年前(縄文時代中期)のものとわかりました。

集骨に伴い、土器・石器・貝製品・骨製品等が出土しました。中でも貝製品は多種多様で、イモガイやシャコガイに精巧な文様を施したものが多く見られます。これらは死者に供えた副葬品と考えられます。

摩文仁ハンタ原遺跡の調査は、沖縄本島南部の海岸崖部にも縄文時代の墓が存在することや、縄文人の死者に対する思いなどについて、新たな資料を提供しました。

【参考文献】

- ・松下孝幸編。2009。『沖縄県糸満市摩文仁ハンタ原遺跡発掘調査報告(1)』土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム研究紀要。(4)。
- ・松下孝幸・湖城清・大城一成・松下真実。2011。『沖縄県糸満市摩文仁ハンタ原遺跡発掘調査報告(2)』土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム研究紀要。(6)。

● 集骨と貝製品出土状況



縄文時代の葬墓制を考える上で重要な遺跡



● 貝製品



● 貝製品



● 貝製品



● 遺跡遠景

糸満市

フェンサ城 貝塚

糸満市字名城



26° 6' 33.77" N
127° 39' 54.81" E



用語解説

●輸入陶磁器

海外貿易によって得られた陶磁器のこと。グスクの発掘調査で発見される貿易陶磁器は主に中国産であるが、他に朝鮮・ベトナム・タイ・日本産がある。貿易陶磁器ともいう。

●フェンサ上層式土器

壺形土器と鉢形土器を主体とし、底径が広い平底が多い。グスク時代の土器で口縁部にコブ状の突起が付けられたものもあり、滑石製石鍋の把手の影響が考えられている。

●フェンサ下層式土器

糸満市名城集落にあるフェンサグスク貝塚の下層から最初に出土した土器。くびれ平底土器とも呼ばれる。甕形が主体でわずかに壺形もある。くびれ平底で無文化が進むが、口頸部にコブ状突起を貼り付ける。沖縄島及び周辺離島に分布する。

●放射性炭素年代測定

放射性炭素(¹⁴C)は炭素の同位体で、天然に存在する放射性元素のひとつ。地球上に広く存在し、食物連鎖によって生物に取り込まれる。遺跡に残る骨や貝、燃料に使った木炭、建物の柱、すべての有機物に炭素が含まれているので、放射性炭素年代測定法は、考古学の分野で最も広く使用されている。¹⁴Cは生物体が死ぬと減り始め、約5730年経過すると生前の2分の1になり、約1万1460年後には4分の1に、約1万7190年後には8分の1になる。この法則を基に、骨などの分析資料中にある¹⁴Cの量を調べることで、何年前のものかが推定できる。

●花粉分析

植物の花粉は種類により形が異なるため、堆積物中に含まれる花粉化石を調べることで、過去の植物の分布・変遷や当時の気候などを推定することができる。

発掘調査風景



名城集落北側に位置するフェンサ城の北側から、西側にかけての崖下部分が貝塚となっています。1967(昭和42)年に琉球大学による発掘調査が行われ、土器、輸入陶磁器、鉄器、貝殻、獣魚骨等が出土しました。この調査では、土器は上下の地層から異なるタイプのものが出土しており、特徴的であったことから、遺跡名にちなんで、上層から出土したものは「フェンサ上層式土器」、下層から出土したものは「フェンサ下層式土器」と命名されました。2010(平成22)年と2012(平成24)年には札幌大学と鹿児島大学の研究者らによる発掘調査が行われ、土器、輸入陶磁器、鉄器、石器、貝製品、ガラス製品、獣魚骨等が出土しています。この調査では、放射性炭素年代測定・花粉分析・植物珪酸体分析といった手法がとられ、遺跡を残した当時の人々の食生活等について科学的な分析が行われました。

この遺跡は弥生～平安並行時代IV期(約1700年前)からグスク時代の移行期(約900年前)にあたることから、グスク時代の始まりを知る上で重要な遺跡の一つです。

●植物珪酸体分析

植物珪酸体は植物の細胞壁に蓄積し、植物体が枯死した後も腐敗せず土壌に保存される。植物ごとの特徴があることから種類を特定でき、花粉とは違い乾燥地や酸性土壌でも残りやすいため、過去の環境と植生を知る手がかりになる。

遺物出土状況



遺跡遠景



当時は
海のものど山のもの
どちらを多く
食べていたのかな。



グスク時代初期の 人々の生活を知る事ができる貴重な遺跡



フェンサ下層式土器ほか



フェンサ上層式土器ほか

当時の人々の食生活や自然環境を自然科学的分析により解明したのだよ。例えば土の中に残る花粉や珪酸体を調べる事で、当時の植生や気候などを知る事ができるのだよ。



貝製品



ガラス玉



金属製品

【参考文献】

- ・友寄英一郎・嵩元政秀. 1969. 「フェンサ城貝塚調査概報」. 琉球大学法学部紀要, 社会篇 (13) : 55-94.
- ・糸満市教育委員会. 1981. 『糸満市の遺跡』.
- ・なあくすくむら誌編集委員会. 1988. 『なあくすくむら誌』. 糸満市字名城区.
- ・高宮広土・新里貴之・黒住耐二・樋泉岳二編. 2018. 『沖縄 フェンサ城貝塚の研究』. 鹿児島大学国際島嶼教育研究センター.

渡嘉敷村

ふな こし ばる
船越原
 い せ き
遺跡

渡嘉敷村阿波連



26° 8' 57.49" N
 127° 20' 55.74" E

用語解説

●爪形文土器

外表面のほぼ全面に、人の爪や指先で施したような文様、あるいはそれを模した文様が見られる深鉢形の土器。沖縄県では縄文時代早期に属しており、その分布は沖縄島と渡嘉敷島、奄美諸島に限られている。

●石斧

石製の刃を付けた斧。木製の柄に取り付けて使用する。



採砂工事をしているときに、多くの土器を見つけたのが発見のきっかけだったんだね。

縄文時代早期の頃は今より6m近くも海面が高かったのだよ。また、遺跡周辺では砂岩や緑色片岩など石斧や敲石の材料になる石が大量に見られるのだよ。



船越原遺跡は、渡嘉敷島の南端部、阿波連集落より南に約3kmの場所に位置する、縄文時代早期(約6000年前)から弥生～平安並行時代I～II期(約2300～2000年前)の遺跡です。

1975(昭和50)年に行われた採砂工事の際に、多くの土器が発見され、その中に当時、沖縄で最も古い土器とされていた縄文時代早期(約6000年前)の「爪形文土器」がありました。遺跡周辺の海岸では、沖縄島の遺跡で出土する石斧等の材料となる石が大量に見られることから、石材を求めて来た人達の遺跡ではないかと考えられています。

2012～2013(平成24～25)年まで、沖縄県立埋蔵文化財センターによる発掘調査が行われ、「爪形文土器」が出土する範囲が確認されました。また「爪形文土器」が出土する層やその上層からは、砂岩や緑色片岩といった遺跡周辺で採れる石がまとまって出土する状況が確認されたことから、石材供給地である可能性が高まりました。

遺跡は大雨や台風による土砂流出や崩壊を防ぐために埋め戻しが行われ、現地保存されています。

【参考文献】
 ・沖縄県立埋蔵文化財センター、2016、『慶良間諸島の遺跡』。

● 遺跡全景（南から）



石器・石材の供給地として重要な遺跡



● 法面保存



● 石材出土状況



● 土層堆積狀況



● 出土土器

渡嘉敷村

あ は れん うら
阿波連浦
かい づ か
貝塚

渡嘉敷村阿波連渡



26° 9' 26.18" N
127° 21' 7.55" E



用語解説

●阿波連浦下層式土器

無文で底がとがった形をした深鉢形。「く」の字の頸部が特徴。



貝塚の正面には、きれいな海と恵み豊かなリーフが広がっているね。

九州の縄文時代晩期の「黒川式土器」の影響を受けたとされる「阿波連浦下層式土器」が確認されたのだよ。沖縄島から石材集めにも来ていたようだし、昔の人の行動範囲は広いのだね。



【参考文献】

・沖縄県立埋蔵文化財センター、2016、『慶良間諸島の遺跡』。

●法面保護状況（トレンチ1周辺）



●遠景（北側斜面より）



あ は れん うら かい づ か と か し き じ ま さ き ゅ う ち
阿波連浦貝塚は、渡嘉敷島の南東側砂丘地に
所在する縄文時代晩期（約2500年前）から弥生
じょうもん ばん き やよい
～平安並行時代Ⅰ期（約2100年前）の遺跡です。
へい あん へい こう い せき
遺跡は1976（昭和51）年の分布調査の際に発見
い せき ぶん ぶ ち ょ う さ さ い は っ け ん
され、その後、沖縄国際大学により確認調査が実
お き な わ こ く さ い だ い が く か く に ん ち ょ う さ じ っ
施されました。その結果、この調査で出土した
し ち ょ う さ ち ょ う さ
「阿波連浦下層式土器」が、九州の縄文時代晩
あ は れん うら か そ う し き じょうもん ばん
期（約2500年前）の土器と特徴が似ている点と、
き とく ち ょ う
その上層から縄文時代晩期・弥生～平安並行時
じょうもん ばん き やよい へい あん へい こう
代Ⅰ期に作られた土器が出土することから、当時
の 人 々 の 交 流 や 生 活 範 囲 を 知 る う え で 重 要 な 遺
は ん い い
跡となっています。

その後、2014～2015（平成26～27）年に遺
い
跡の詳細な範囲を確認するため、沖縄県立埋蔵
せき しょうさい はん い かく に ん お き な わ け ん り つ ま い ぞ う
文化財センターによる調査が行われ、遺跡の範囲
ぶん が 財 セ ン タ ー に よ る ち ょ う さ い せき はん い
や、「阿波連浦下層式土器」が出土する層の下に、
あ は れん うら か そ う し き そ う
さらに古い土器が出土する層が存在することが確
にん しょう
認できました。遺跡は大雨や台風による土砂流出
い せき ど しゃ
や崩壊を防ぐために埋め戻しを行い、現地保存さ
ほう かい ふせ う も と げ ん ち ぼ ぞ ん
れています。

● 遺跡全景（写真中央が阿波連浦貝塚が所在する砂丘）



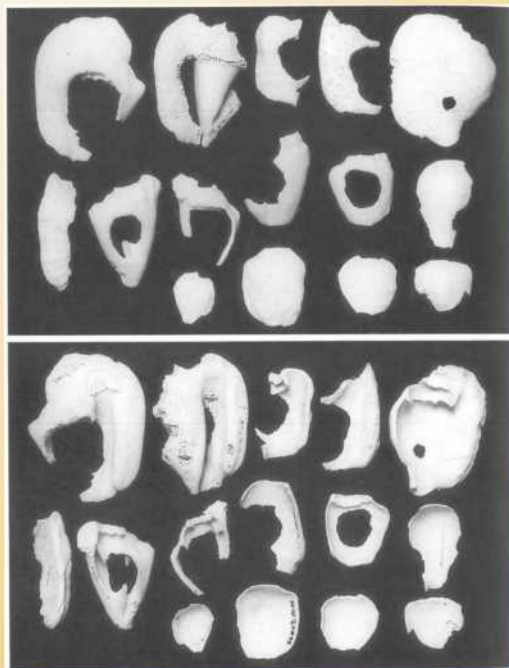
九州の縄文時代晩期の土器に影響を受けた土器が発見される



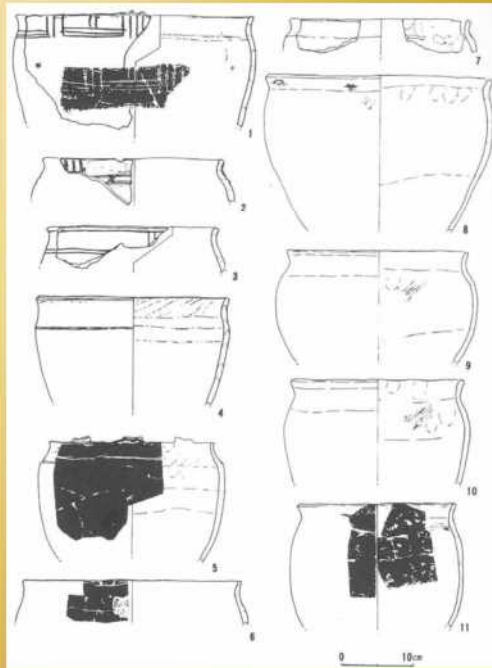
● 貝集中遺構



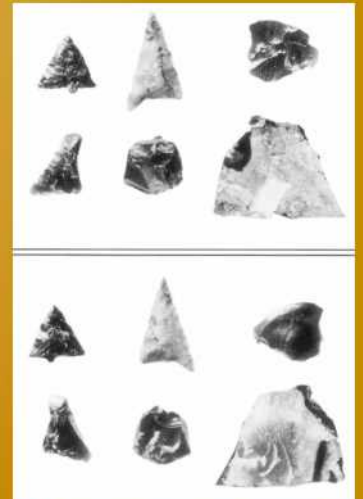
● トレンチ1



● ゴホウラ製貝輪 未成品



● 出土土器



● 黒曜石製品（石鏃・剥片・石核）

座間味村

ふるざまみ
古座間味

かいづか
貝塚

座間味村字座間味



26° 13' 35.15" N
127° 18' 36.72" E



用語解説

●複合遺跡

2つ以上の時代の遺跡が重なっている遺跡。

●竪穴住居跡

地面を浅く掘り下げて床面とし、その上部に屋根を葺く構造の住居の跡。

●根石

石垣などで一番下に積む、基礎となる石。

●ゴホウラ

インド洋・太平洋のサンゴ礁の海で採れる大きな巻貝。主に、男性用の腕輪に加工された。交易品としての流通はイモガイの項を参照。

●黒曜石

火山岩の一種で沖縄では産出しない。ガラスとよく似た性質を持ち、割ると鋭い断面を作る。世界各地でナイフや矢じりなどの石器として使われた。日本では九州以北の地域で産出する。

●ゴホウラ集積遺構



座間味島の南東海岸の古座間味一带に広がる、縄文時代からグスク時代までの複合遺跡です。山側に縄文時代(約4000~2300年前)、海側に弥生~平安並行時代I~III期(約2300~1700年前)とグスク時代(約900~600年前)の遺物が一部重なるように分布しています。1980~81(昭和55~56)年の発掘調査で縄文時代と弥生~平安並行時代の住居跡が見つかりました。

縄文時代の住居跡は、2m四方の角が丸みを帯びた石組の竪穴住居跡で、砂地を約30cm掘り込み、周縁には壁の崩れを防ぐために大型の板状の石を立てて根石として並べ、隙間を小さな礫で埋めて補強しています。内部からは土器や石器、貝製品が多く出土しています。

弥生~平安並行時代の住居跡は平地に築かれており、直径6mの楕円形で、内部から土器や石斧、貝製腕輪などが出土しました。また住居跡内の貯蔵穴からは、21個のゴホウラとともに、九州産の黒曜石の剥片が見つかったことから、九州の人たちとの交流があったことがうかがえます。

【参考文献】

・座間味村史編集委員会編、1989。
『座間味村史 上巻:然・歴史・産業』、座間味村役場。

● II区竪穴住居跡



縄文時代からグスク時代までの長期にわたる
住居の移り変わりがわかる遺跡

古座間味ビーチの
上の方にある
貝塚なんだね。
この海から九州へ
出発したのかな？



時代の違う住居跡の他に
土器や石器、貝製品が
多く出土しているよ。九州
との交流を示す黒曜石も
出土したのだよ。



● III区平地住居跡



● 遺跡遠景



● 発掘調査風景

久米島町

しみず かい づか
清水貝塚

久米島町字鳥島



26° 20' 53.5" N
126° 44' 20.14" E



用語解説

●魚網錘

魚をとる網を沈めるための重り。二枚貝の殻頂(尖った部分)に穴をあけ、網に結び付けたと考えられる。

●貝匙

ヤコウガイを加工して作った杓子(しゃくし)やスプーンの形に似た製品。

●文様

道具や衣服などの表面に装飾された図形。同じ図柄の繰り返しによって構成されるものを指すことが多い。

●貝符(貝札)

貝を板状に加工し、文様が施されたもの。装身具として利用されたと考えられる。

●管玉

美しい石を加工し円筒形にしたもの。多数連ねて装身具とする。

貝符はイモガイの側面を切り取って作られるんだ。イモガイの集積遺構もあるので、たくさんイモガイを採る事ができたのだろうね。



出土土器



久米島町立清水小学校の運動場西側にある、弥生～平安並行時代(約2300～900年前)の貝塚です。1985(昭和60)年に土壌改良事業に伴う発掘調査が行われました。その結果、イモガイの集積遺構や石列(石を列状に並べた)遺構が確認されました。その他にも土器、石器、石製品、貝製品、鉄製品などが得られています。貝製品は多様で、ゴホウラで作られた貝輪やヤコウガイで作られた貝匙、漁網錘などがあります。中でも特徴的なのは、札状に加工したイモガイの表面に文様を施した貝符(貝札)です。比較的新しい上の地層からは簡素なタイプが、その下の古い地層からはレリーフ技法による華麗なタイプが出土しています。

また、他地域との交流を示す遺物としては管玉と鉄製品があります。これらは貝輪素材等としてのイモガイやゴホウラを渡す見返りの品として、九州から得たものと考えられます。

このように、清水貝塚は他地域との交流を垣間見ることができる貴重な遺跡です。

※イモガイ集積遺構

この遺構は九州との貝交易のために、イモガイを集め砂に埋めてストックしていたものです。九州の人々が土器等様々な品を携えてやって来て、イモガイやゴホウラと交換しました。

※鉄製品

この時期、鉄品生産はまだ行われていないと考えられており、他地域との交流の証拠となります。

【参考文献】

- ・具志川村教育委員会. 1989. 『沖縄県久米島具志川村清水貝塚発掘調査報告書』.
- ・具志川村教育委員会. 1994. 『具志川村の遺跡』.

● 現在の様子



多種多様な貝製品を多数発見



● 貝符



貝符の中には
浮き彫り細工が
施されているものもあり、
きれいだね。



● ヤコウガイ製杓子状製品



● 鉄器及び管玉

